—動名詞構文—

冨　田　博　文

1．伝統文法では，動名詞（gerund）が動詞的性質と名詞的性質を伴わせ持って成立した，歴史的にも複雑な変化をしてきた構文，準動詞（verbal）の一つであることは，よく知られていることである。

歴史的に，動名詞は中期英語（Middle English）の14世紀頃から，統語的特徴として，名詞的性質から動詞的性質が増してくる傾向がみられる。現代英語（Present-day English）のV–ing形は，古期英語（Old English）に既にあったのではなく，長い歴史の中で，例えば，the sudden refusing of the offer のように純粋に名詞的構造を維持しながら，一方で，refusing the offer suddenlyのような，分詞，不定詞のもつ動詞的構造を発達させていったと考えられる。

Jespersen（1933：320，1940：89）によれば，動名詞の名詞的性質と動詞的性質の主要な点を挙げると次のようになる（例文は，主として，Declerck（1991）から借用したものである。）。

（1）名詞的性質：

a. 主語，述語，目的語になることができる。

e.g. *Gossiping* is her main delight.

Seeing is *believing*.

Fred has given up *smoking*.

b. 冠詞をとることができる。

e.g. *The piercing screeching* of the monkeys woke me up.

c. 形容詞的修飾語句をとることができる。

e.g. *Their constant changing of their minds* is very irritating.

d. ネクサス実詞（nexus substantives）と同じように，所有格や，ofとbyの

前置詞句によって文法的関係（意味上の主語や目的語）を表すことができる。

e.g. After this he turned away and recommended *his passing of the pavement.*

（2）動詞的性質：

a. 前置詞句を介在させることなしに，直接目的語をとることができる。

e.g. I was surprised at *Bill leaving* (*of) *the room.*

b. 副詞的修飾語句をとることができる。

e.g. I was annoyed by *her waiting so long.*

c. 完了形をとることができる。

e.g. She will not admit to *having been in the pantry.*

d. 受動態をとることができる。

e.g. I do not like *being told off in front of the others.*

ただ，動名詞の統語的特性が網羅的に述べられてはいるが，同じV–ing形をした分詞と区別されることはあっても，動名詞がそれ以上厳密に下位分類されることはなかった。本稿では，動名詞の内部構造を統語的・意味的特性の観点から考察することにする。

2. 次の（3）を動名詞に「書き換える（paraphrase)」と（4）のように，二通りになる。

（3）He danced the tango skillfully .

（4）a. *his skillful dancing of the tango*

b. *his dancing the tango skillfully*

さらに,(4b)は次の（5）のようにパラフレーズすることもできる。

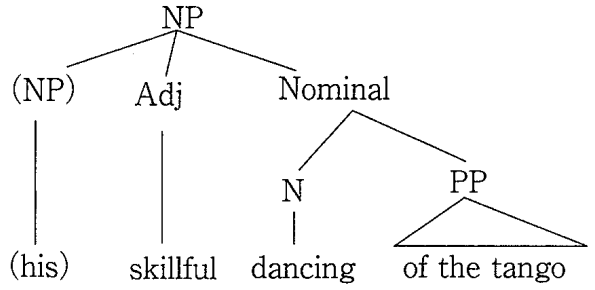
（5）*his having danced the tango skillfully*

統語的観点から見ると，動名詞の内部構造は，通時的（diachronic）には，次の

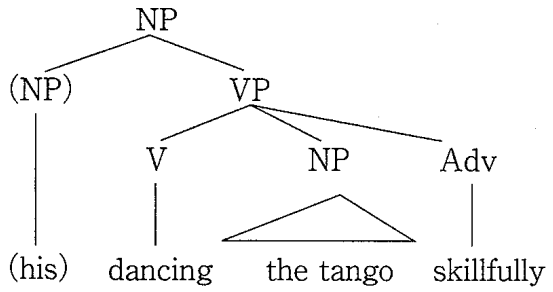
((6a) = 4 a) の名詞的性質から ((6 b) = 4 b) の動詞的性質へと変化していったと考えられる。

(6)

(a) 名詞的動名詞：



(b) 動詞的動名詞：



Chomsky (1970: 215) は上述の動名詞の内部構造を (7) のように分類している。

(7) a. John's refusing the offer
　　b. John's refusing of the offer
　　c. John's refusal of the offer

つまり，変形文法の立場から，名詞化 (nominalization) は次の三種類を認め，(7a) を動名詞的名詞形 (gerundive nominal)，(7b) を (7a) と (7c) の両者の特徴を兼ねそなえている混合形 (mixed form)，(7c) を派生名詞形 (derived nominal) とそれぞれ呼んでいる。(7a) は変形によって派生させ，(7b) と (7c) は変形を用いず，直接に基底構造から派生させる語彙論的立場 (lexicalist hypothesis) を採っている。

しかしながら，一般的名称としては，Wasow and Roeper (1972) では，動詞的動名詞 (verbal gerund) と名詞的動名詞 (nominal gerund) という名称が用いられ，Thompson (1972) にも受け継がれている。ここでは，その名称に従うことにする。(7a) は，伝統文法でいう真の動名詞を表す動詞的動名詞，(7b) は名詞句 (NP) と同じ内部構造を持つ名詞的動名詞，(7c) は派生名詞と呼ばれている。さらに，ここでは，主として動詞的動名詞と名詞的動名詞の統語的・意味的特性の相違点と共通点もみることにする。

3. 名詞的動名詞と動詞的動名詞は，まず，いずれもその名称が示す通りに外部構造は名詞句である。ただし，その内部構造に関して言うなら，（6b）のような動詞的動名詞は動詞V－ingを中核（verbal nucleus）とする動詞的色彩が強い働きの内部構造を持っているのにたいして，名詞的動名詞は，（6a）のように行為名詞（action nominal）と呼ばれ，名詞的働きとしての内部構造を持っていることになる。

このように，動名詞を二種類認めると，ほぼ同じ意味を表す文・動名詞（二種類）・名詞句として四つの形式が可能となる。

（8）a. The enemy destroyed the city.
　　b. the enemy's destroying the city
　　c. the enemy's destroying of the city
　　d. the enemy's destruction of the city

なお，主語ということだけであれば，（8）の定形節（finite clause）や非定形節（non-finite clause）だけではなく，いづれの場合も主語があると考えることができる。（8b）は動詞的動名詞であり，（8c）は名詞的動名詞であり，（8d）は名詞を主要部（head）とする名詞句である。いずれも主要部とそれにたいする補部（complement），つまり，主語と目的語を伴っている。しかし，（8d）のような形式を節と考えないのは，その主要部であるdestructionが動詞的特性を備えていないからである。

換言すれば，（8b）の動詞的動名詞の場合は，本来，内部構造が文の機能を果たし，必ず特定の主語が存在するので，それは動名詞の前に所有格か通格（common case）で現れるか，あるいは，そのいずれの形式でも現れない場合には表面的な文構造のどこかにそれを復元（recoverable）する手掛かりとなる語が，通例，あるということになる。

（8c）のような名詞的動名詞の場合は，（8b）の動詞的動名詞と異なって，基本的には名詞句としての内部構造－「限定詞＋名詞句（＋前置詞句）」という構造－を持っているので，所有格enemy'sがなくても文法的に適格な文になる。（7a）のJohn's refusing the offer の所有格John'sを定冠詞theで置き換えること

はできないが，（7b）と（7c）のJohn'sは定冠詞とthe refusing (refusal) of the offerのように交替することができる。また，名詞的動名詞と派生名詞の場合，限定詞（冠詞）なしで，refusing of the offerあるいはrefusal of the offerの形式で用いることはできないのと平行的である。外形は同じJohn'sであっても，文法上の資格はまったく異なっているのである。このことは，内部構造を文とする動詞的動名詞なのか，内部構造を名詞句とする名詞的動名詞なのかの決め手は，その働きの相違に起因していると説明できる。

（8d）の派生名詞の場合でも，認知的視点からみると，論理的主語はthe enemyであるが，自律概念である「町の破壊（city's being destroyed）」に依存する概念である。依存概念であるゆえに，the destruction of the cityのように所有格を省略することができるが，the enemy's destructionのように単独では存在することができない。自律概念に関る論理的目的語the cityは，論理的主語の有無に関らず，the city's destructionのように単独で現れることができる。つまり，論理的主語が所有格となれるには，なんらかの形で論理的目的語が具体化されている場合である。

この言語事実の理解のために，さらに，次の（9）と（10）を見ることにする。

（9）a.　the Khmer Rouge's destruction of the city
　　b.　the city's destruction by the Khmer Rouge
（10）a.　Sanyo's production of the word processor
　　b.　? the word processor's production by Sanyo

派生名詞destructionとproductionの動詞形であるdestroyとproduceを比べてみると，目的語はいづれも定名詞句表現であるが，「produce＋目的語」のほうが「destroy＋目的語」よりも他動性（transitivity）の度合いが低いと言える。動詞によって表された行為が実現するためには，目的語で表された対象の存在が必要かどうかという点に注目すると，destroyの場合には，produceの場合とは異なって，目的語で表された対象の存在が必要となるからである。

つまり，Fillmore（1968：3–4）が，隠れた文法的差異（covert grammatical distinction）の例として採りあげている，表面上は，統語的には「動詞＋目的語」

の関係にすぎないが，意味的には，それぞれ異なった機能を果たしていることがわかる。この場合，destroyの目的語は動詞の行為にさきだって存在する被動的目的語（affectum object）であるのにたいして，produceの目的語は動詞の表す行為の結果生じる製作物を示す達成目的語（effectum object）であるために，認知の焦点（focus of cognition）になりにくくなっている。達成目的語が，旧情報の占める位置である句頭に唐突に現れると，理解の出発点である基盤が得られにくくなり，(10b) のように適格性の度合いが低くなると考えられる。すでに述べたように，動詞によって表された行為が実現するためには，目的語によって表された対象の存在が条件となっていることになる。

さらに，次の例を比較することにする。

(11) a. *His swimming* was mediocre.
（彼の泳ぎ方はたいしたことはない。）
b. *His swimming* was a mistake.
（彼が泳いだ（という事実）は間違いだった。）

(11) は次のようにパラフレーズすることによって両者の意味の相違を説明することができる。

(12) a. The way in which he swam *was mediocre*.
b. The fact that he swam was a mistake.

(11) のhis swimmingの部分だけをみると，(i)「彼の泳ぎ方（the way)」と解釈するのか，(ii)「彼が泳いだ事実（the fact)」と解釈するかで，曖昧になる。つまり，(11a) は名詞的動名詞であり，(11b) は動詞的動名詞であると解釈されることになる。しかし，(11) のように共起する述詞（predicate）の意味内容によって，その曖昧さが解消される場合もあるが，(13) のように共起する述詞によって曖昧文になる場合もある。

(13) His dancing *was unexpected*.

(i) 彼のダンスの踊り方は意外だった。
(ii) 彼がダンスをしたことは予想もつかなかった。

(13 i) の読みは名詞的動名詞で「仕方 (the way)」を含意し，(13 ii) の読みは動詞的動名詞で「ダンスをすること (the fact)」を表している。これは述詞である unexpected という述部形容詞が (i)「意外な」(incredible, surprising) という評価形容詞 (evaluative adjective) とも，(ii)「予想もしない，ありえない」(unlikely) という法形容詞 (modal adjective) とも，解釈されることに一因があると考えられる。

また，名詞的動名詞と動詞的動名詞とは，基底になっている動詞が自動詞である場合には，構造上，(14) にみられるように両者の解釈が重なることになる。

(14) a. I do not approve *his driving*.
　　b. I enjoy *singing*.

名詞的動名詞の場合であれば，(14a) は，「彼の運転の仕方は認められない。」の意味であり，動詞的動名詞であれば，「彼が (自分で) 運転することには賛成できない。」の意味になる。同様に，(14b) は，それぞれ，「私は唱歌が好きだ。」および，「私は (自分で) 歌をうたうのが好きだ。」の意味になる。

Lees (1960: 65, 67–68) および，Thomas (1965: 108–109) は，名詞的動名詞がゼロ冠詞をもつことを否定しているが，(14b) と次の (15) のように，名詞句をとりまく条件によって，必ずしも具体的な言語形式をとって表面に現れるとは限らないのである。

(15) a. I enjoy *graceful diving*.
　　b. I detest *loud singing*.
　　c. *Coughing at night* startles me.
　　d. I dislike *whispering about my friends*.
　　e. *Loud screaming* was considered.

しかし，ここで挙げた例のなかで，(15c) と (15d) は構造上の曖昧さをもっており，動詞的動名詞としての解釈も可能になる。動詞的動名詞として解釈すれば，(15c) は，「夜 (自分の) 咳がでるとびっくりする。」の意味であり，(15d) は，「自分の友達のことについて (自分が) ひそひそ話しをするのは嫌いだ。」の意味になる。

動詞的動名詞と名詞的動名詞の統語論上の相違を観察するために，まず，次の (16) の言語形式をみることにする。

(16) his claiming immunity from prosecution

この場合の (16) は，全体として，動詞的動名詞を形成し，その (名詞句 (NP) というよりむしろ動詞句 (VP) の) 主要語は動詞的動名詞 claiming である。動名詞に他動詞がもちいられている場合は，その目的語は，(16) における immunity のように，動詞に直接後続することになる。つまり，動詞的動名詞には，(17) におけるように，(i) その主語が，明示的な形で，現れない場合もあるが，現れる場合には，所有格 (あるいは通格) の形式で表される，(ii) 動名詞には，所有格は別として，定冠詞や限定詞が先行することができない，(iii) 特定の行為の様態 (manner) を言及する副詞句で修飾することができる，(iv) 定形節の場合と同じように，主語は動名詞に先行し，目的語はそれに直接後続する等の，統語的特徴がある。

(17) a. She is worried by *his being ill so frequently.*
b. I do not mind *John('s)knowing the truth.*

これに対して，名詞的動名詞の場合は，次の (18) にみられるように，of–前置詞句が介在する。

(18) his claiming of immunity from prosecution

名詞的動名詞の場合は，さらに次の (19) のように，限定的な形容詞を伴った

言語形式も可能である。

(19) his sudden claiming of immunity from prosecution

このような名詞的動名詞における所有格hisは明らかに限定詞である。それは，この構文がthe destruction of the cityのような，純然たる主要語destructionを中心語としてもつ名詞句と全く平行的な構造をもっているからである。この構造上の平行性は，次の（20）にみられるように，his の代わりに定冠詞the と交替した構文が，文法的に適格であることからも明らかである。名詞的動名詞の場合には，（20）におけるように，(i) 動名詞には限定詞が先行する，(ii) 形容詞句で修飾することができる，(iii) of–前置詞句が介在する等の，統語的特徴がある。

(20) a. *The piercing screeching the monkeys* woke me up.
　　b. *Mrs. Thatcher's ruthless handling of the situation* did not meet with general approval.

なお，名詞的動名詞も動詞的動名詞も，（21）におけるように，所有格の先行を許し，すべての動名詞が必ずしも形容詞あるいは副詞を含んでいるとは限らないので，名詞的動名詞であるか，動詞的動名詞であるか，を決める唯一の基準は，of–前置詞句の有無によって判断することになる（cf. Fraser (1970: 84), Declerck (1991: 497))。

(21) a. I resented [*his constant questioning of my motives*].
　　b. I resented [*his constantly questioning my motives*].

所有格の特徴的使用は，動詞ではなく，名詞の属性と符号するが，（21）におけるように，ともに所有格が用いられている。しかし，（21a）の場合，形容詞constantを伴い，of–前置詞句が介在するので名詞的動名詞となり，（21b）の場合，副詞constantlyを伴い，目的語が直接後続するので，動詞的動名詞となる。

ところが，(16) におけるような，動詞的動名詞における所有格hisを限定詞である考え方に疑問が残ることが指摘されている。例えば，動詞的動名詞の場合，次の (22) にみられるように，名詞的動名詞と異なって，受動態・完了形の形や，－ly副詞の伴った構文と共起することができる。

(22) a. His being given a nice present made her happy.
b. his having claimed immunity from prosecution
c. his suddenly claiming immunity from prosecution

換言すれば，動詞的動名詞には，数 (number)・人称 (person)・法 (mood) に関する特徴は示さないが，動詞の特徴つまり動詞の意味とか動詞の文法的機能が保持されているからである。

このように，動詞的動名詞は定形節と同じく，「主語＋動詞」という内部構造をもっているという点で，文または節という資格をもっていると考えることができる。したがって，次の (23) のように，意味上の主語の所有格hisを，限定詞の典型である定冠詞theに交替できる言語形式が，英語には，構造上，はじめから存在し得ないので，文法的に不自然で，不適格な文になっている。

(23) a. *the claiming immunity from prosecution
b. *the having claimed immunity from prosecution
c. *the suddenly claiming immunity from prosecution

動詞的動名詞は，意味上の主語を伴うことができるが，冠詞は伴うことができない。これに対して，名詞的動名詞は，必ず，意味上の主語か，冠詞を伴うことになる。

(24) a. *Having sung well* is evidence of his ability.
b. **The* hav*ing sung well* is evidence of his ability.
(25) a. *The magnificent singing* delighted us all.
b. **Magnificent singing* delighted us all.

さらに，また，動名詞が名詞的に振舞うか動詞的に振舞うかは，次の（26）をみれば，明らかである。

（26）a.　This painting represents *the killing of Caesar by Brutus*.
　　b.　*This painting represents *Brutus killing Caesar*.

representの後は名詞句をしたがえるのであって，文的要素をとらない。もし，（26a）のように，名詞的動名詞が他動詞としてもちいられると，of–前置詞句は，直接目的語を表し，by–前置詞句は動作主（agent）を表す文法的関係を示すマーカーとしての機能を果たしていることになる。

（27）*That criticizing of the chairman by Bill* was embarrassing.

もし，直接目的語が存在しない場合は，次の（28）のように，of–前置詞句は，動作主としての働きをすることになる。

（28）*The cooing of pigeons* distracted her from her work.

しかし，名詞的動名詞は，動詞的動名詞と比較すると，きわめて格式的（formal）であり使用するのに，いくつかの厳しい制限を受けるために，相対的に，文語的で，あまり使用頻度は高くはない。

まず，第一に，名詞的動名詞は activity，event，act，process 等の名詞が，生起しえる環境以外には生じることはできない。次の（29）の前置詞の相違に注意するとよい。

（29）a.　I am surprised by *John's fluent speaking of English*.
　　b.　I am surprised at *John's speaking English fluently*.
　　(*I was surprised at *John's fluent speaking of English*.)

受動態の動作主を導く前置詞は，周知のように，現代英語ではbyである。し

かし，by 以外の前置詞が代わりに用いられると，（29b）に見られるように，前置詞 at は態というものを原因・結果の関係とみなして，その原因を表現していることになる。（29a）と（29b）を比較すると，be surprised に含まれた受身の意味が，だんだん薄れていき，つまり統語的に中立化していくのに気がつくことができる。（29a）から（29b）に移っていく過程を過去分詞に焦点を当てて考えて見ると，過去分詞というのは受身を示す動作主が強く残っているあいだは，動作主は必然的に by によって表されているが，動作主的機能が薄れてゆくにつれて，形容詞化が進んで，一般的にその束縛から自由になり，by で表された直接的な動作主を，at で表された間接的な理由・原因としてとらえる傾向がでてくる。したがって，（29a）の be surprised BY an action では，受身的性格が強く，「行為（の仕方）に不意をつかれて驚かされる」という動作を表すのに対して，（29b）の be surprised AT the fact that... では，形容詞的性格が強く，「～という事実を知って（聞いて）驚いている」という状態を表している。また，（29b）は，原因・理由を示す不定詞で，I am surprised to know (hear) the fact that... のようにパラフレーズすることもできる。

第二に，状態動詞（stative verb），すなわち非行為（nonaction）を示す動詞は，名詞的動名詞になりえない。

（30）a. **His knowing of the robber's face* was very helpful to the police.

b. **His close resembling of his nephew* surprised us.

第三に，Fraser（1970：91-92）は，look up the information のような，いわゆる動詞・副詞結合（phrasal verb）は，look the information up の形からでは名詞的動名詞は作れないし，動詞句が慣用句の一部をなしている take advantage of のような場合にも，名詞的動名詞はつくれないと述べている。

（31）a. **The looking of the information up* took three hours.

b. *The looking up of the information* took three hours.

（32）a. **The taking of advantage of him* caused a commotion.

b. ∗ *The taking advantage of of him* caused a commotion.

(32b) は，前置詞の衝突 (conflict between prepositions) の現象がみられ，一方の前置詞が他方に吸収されない限り，文法的に不適格な文になる。

さらに，動詞が目的語を伴う場合，動詞的動名詞は，(33a) のように，そのままの形でよいが，名詞的動名詞の場合は (33b) のように，of–前置詞句を介在させることになる。したがって，動詞の後に間接目的語がくる二重目的語構文 (double object construction) の場合には，名詞的動名詞は不可能になる。しかし，(33c) のように，与格構文 (dative construction) にすると，of–前置詞句を介在させる名詞的動名詞は可能となる。

(33) a. I was surprised at *John's giving Mary a nice present*.

b. *I was surprised at *John's giving of Mary a nice present*.

c. I was surprised at *John's giving of a nice present to Mary*.

また，動名詞の意味的相違は，(34) と (35) におけるように，通例，名詞的動名詞の場合は，常に，「行為 (action)」ないし，その行為の遂行，つまり「仕方 (the way)」を意味するのに対し，動詞的動名詞の場合は，「事実 (the fact)」ないし「行為」のいずれかの意味を表すことが多い。

(34) 名詞的動名詞：

a. *John's questioning of Bill's leadership* has caused a lot of concern.

(= John's action has caused a lot of concern.)

b. *Jack's handling of the situation* was not tactful.

(= The way in which Jack handled the situation was not tactful.

(35) 動詞的動名詞：

a. We would like to avoid *opening this door during the party*.

(= We want to avoid the performance of that action.)

b. *His being a policeman* alters everything.

(= The fact that he is a policeman alters everything.)

Quirk *et al.* (1985：1551) では，派生名詞とV–ing形の行為名詞について，

(36) を引用し,(36a) は，事態（event）を進行中の行為として捉えているのにたいして，(36b) は完結性を含めて，事態を全体として捉えていることを指摘している。

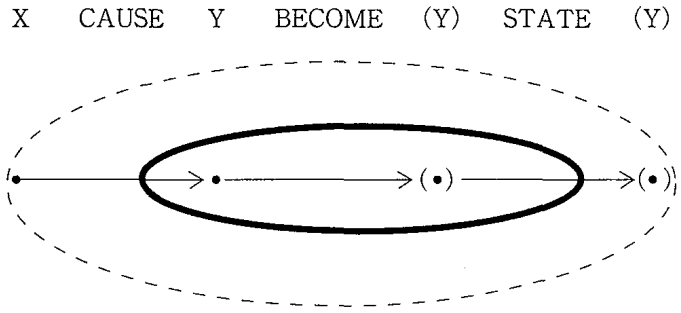
(36) a. *His exploring of the mountain* is taking a long time.
b. *His exploration of the mountain* took /will take a long time.

したがって，次の (37) のように，V–ing名詞は完結性を含意する形容詞と共起することができない。

(37) a. the complete destruction / *destroying of the city
b. the thorough exploration / *exploring of the forest

このことは，形容詞 complete，thorough と共起できる派生名詞が完結点を持つものとして解釈されていることにたいし，共起できないV–ing 名詞には完結点が存在していない解釈がなされていることになる。Langacker (1991) によると，完結プロセスは，もともと事態の完結点があるという，内在的に境界 (bounded) もつので，派生名詞の場合は，事態を全体的に，境界をもつモノとして解釈されている。これに対して，V–ing 名詞は同じ事態の内部構造に意味を焦点化させて，その結果として本来もっている境界が，認知のスコープからはずされているのである。このことを，動作主が，ある行為をおこなった結果，ある対象に状態変化が引き起こされるという因果関係の事態認知パターンを因果連鎖 (casual chain) で表示すると，次の (38) のようになる。

(38) 派生名詞と名詞的動名詞の因果連鎖：



(38) のベース (base) となる客観的状況は，基本的に，同じであるが，どの部分に焦点を当てて認知のスコープの範囲内に収め，一つの事態として把握し，言語化するかを表している。派生名詞の場合は，破線の楕円形が示すように，事態の始まりと終わりをスコープの範囲に収め，対象を境界のある存在としてみる有界的解釈を，V–ing 名詞の場合は，太線の楕円形が示すように，事態の完結性を含まない，境界のない無限定の存在としてみる非有界的解釈を行っていることになる。

4. 次の Huddleston and Pullman (2002：1192) の例をみることにする。

(39) a. I enjoyed *his* / **him reading of the poem.* [determiner in NP：genitive required]

b. I caught him / *his reading my mail. [object of matrix：genitive excluded]

c. I remember his / *him reading my mail.* [subject：genitive or accusative allowed]

(39a) の場合，reading は，名詞の読みでそれに先行する所有格 his は，したがって，限定詞でなければならない。(39b) の場合，him は，主節の本動詞の目的語 (object of matrix) であり，従属節 (動名詞節) の主語になりえないので，所有格にすると，不適格な文になる。また，(39c) の場合，reading は，動詞の読みであり，したがって，代名詞の所有格あるいは目的格は動名詞節の主語となり，そのいずれかが選択されることになる。

(40) は，それゆえ，曖昧な文になる。

(40) Kim didn't like *his singing.*

singing を名詞と解釈すると，Kim と別人の所有代名詞 his は限定詞と同じ働きをし，the way in which he sang の意味の名詞的動名詞であるのにたいして，singing を動詞と解釈すると，his は He sang. のように意味上の主語としての働

きをし，内部構造を文とする動詞的動名詞になる。

また，次の（41b）のように所有格hisではなく目的格himにすると，動詞的動名詞の読みになり，曖昧文ではなくなってしまう。さらに，（39b）と（39c）の構造上の相違も，(41) をみると理解することができる。

(41) a. I caught *him mistreating my cat.*

b. I resented *him mistreating my cat.*

（41a）は，I caught him in the act of mistreating my cat. の意味で，him は主節動詞catchの〈受動〉項（patient-argument）であり，（41b）の場合は，私が憤慨している対象は目的格の him ではなく，him が私の猫を虐待した全体的事態を示すことになる。catch の場合は，目的語の占める位置に定形節をとることができないが，resent の場合は目的語として定形節をとり目的格 him は主節の項ではなく従属節の mistreat の項であることになる。

このことは，まず，統語的証拠を挙げると，擬似分裂文（pseudo-cleft sentence）にすると基底において，resent は定形節をとるが，catch はとれないことがわかる。

(42) a. What I resented was *him mistreating my cat.*

b. *What I caught was *him mistreating my cat.*

また，(43) のように，名詞句Kimは，（43a）の場合は主節動詞の直接目的語であるが，(43b) のように，従属節の意味上の主語になる場合は，目的格（通格）だけではなく，所有格Kim'sの形も許容される。

(43) a. I caught *Kim / *Kim's mistreating my cat.*

b. I resented *Kim / Kim's mistreating my cat.*

介在する名詞句 Kim が，主節の目的語である場合のみ，(44) におけるように，目的語を主語の位置に上昇（object-raising）させて，受動態にすることができる。

(44) a. *Kim was caught mistreating my cat.*

b. **Kim was resented mistreating my cat.*

しかし，次の（45）のように，特に，所有格を伴う動名詞句を受動態にすると，周辺的（marginal）ではあるが，容認可能性が高くなる場合がある。

(45) ? *Kim's being given such an unfair advantage* was deeply resented by everyone.

（39c）の場合には，意味上の主語として，所有格あるいは目的格（通格）のいずれを選択するかは，それはどのような要因に其づいて行はれるのであろうか。一般に，両者の相違はスタイル（style）の違いとされている。

主節の主語と動名詞の主語が異なる場合は，文語的な格式体（formal style）では名詞・代名詞場合は，所有格を用い，口語的な略式体（informal style）では，名詞の場合は，'sの付かない通格，代名詞の場合は目的格の形が好まれる傾向が強い（cf. Swan（1995：279））。これに対して，Leech（1987：114）では，文頭の位置は，次のHis / Him reconizing his faults is a good thing. について，所有格と目的格のいづれを用いても，口語性が落ち，「かなりまれで，ぎこちない（unusual and awkward）」とされている。また，文裂文（cleft sentence）の焦点の位置には，It was John's / *John beating you that surprised you. のように，通格ではなく，名詞的機能の度合いの高い所有格の場合のほうが，スタイルの差を別として，許容される。

しかし，「ぎこちなく，堅苦しく，衒学的（awkward, stilted, or pedantic）」に思われる場合を除いて，動名詞の意味上の主語として所有格の形を支持する保守的な現代語法辞典でも，目的格の用法を，口語英語として容認している。

(46) a. Do you mind *my / me closing the window*?

b. I was angry at *Mary / Mary's getting married.*

（46b）のように，動名詞の主語として，所有格が用いられる場合と，目的格

（通格）が用いられる場合とで，微妙に意味が異なる場合がある。所有格のほうは，怒りの対象が「メアリーの結婚」であるのにたいして，通格の場合は「メアリー」にある。また（46b）の通格にした構文は，動名詞付き対格（accusative with gerund）の名前で呼ばれている。

動名詞の主語は，直接動名詞に先行しなければならないという条件がある。もし，（47）のように，主語に随意要素が後続する場合や，主語に対照強勢（contrastive stres）が置かれる場合には，目的格か通格の主語が，要求されることになる。

（47）a. He resented *Kim, after only two years*, being promoted manager.
　　b. I objected to *KIM* doing it.

動名詞の主語は，所有格であろうが，目的格（通格）であろうが，通例，動名詞節の文頭の位置を占めなければならないのである。しがって，（48b）のように，随意要素を主語の位置である文頭に前置したり，（48d）のように，主語を後置したりすることができないのである。

（48）a. I resented *them / their* going without me.
　　b. *I resented without me *them / their* going.
　　c. I remember *a troop of boy scouts* suddenly appearing over the hill.
　　d. *I remember suddenly appearing over the hill *a troop of boy scouts*.

また，たとえどんなに格式ばっていても，（49）のように，動名詞の意味上の主語として所有格をとることのできない名詞句がある。たとえば，(i) 嘘辞の there，(ii) this，that，all，some，(iii) both of them，some of us 等などの名詞句は，名詞句の限定詞としてではなく，動名詞節の主語として，目的格の形で現れる場合である。

（49）a. He resented *there / *there's* having been so much publicity.
　　b. I won't accept *this / *this's* being made public.

一般に，所有格を排除するわけでもないが，(50) のように，動名詞の主語として目的格の使用頻度がはるかに高く，所有格が好まれない場合もある。

(50) a. He objected to *the girls* / ? *the girls'* being given preferential treatment.

b. It involved *the Minister of Transport* / ? *the Minister of Transport's* loving face.

(50a) の動名詞の意味上の主語の複数名詞句girlsは，話し言葉では，それに対応する所有格と同一であるが，書き言葉では，アポストロフィーによって区別されても，なおアポストロフィーのない通格の形のほうが，はるかに一般的である。一方，群属格 (group genitive) のように，the Minister of Transport's performanceのように名詞句につく限定詞としての機能を果たす場合は，容認可能になる。しかし，(50b) におけるように，動名詞節の意味上の主語として，かなりの長さと複雑さ，特に，後置修飾語句を伴う名詞句を所有格にすると，ぎこちなくなってしまい，適格性の度合いが低くなる。

さらに，動名詞の意味上の主語が，先行文に存在している場合は，(51a) のように，動名詞の意味上の主語は表されない。一方，そうでない場合は，(51b) のように，必ず表されなければならない。

(51) a. I like *dancing*.

b. I like *his dancing*.

(51) は，名詞的動名詞か動詞的動名詞かのいづれにも解釈することが，可能で，曖昧である。(51a) を動詞的動名詞の例で考えると，I like dancing. のdancingは，表面的には，likeの目的語である名詞句であるが，内部構造は，(40) におけるように，I dance. に対応する意味内容をもっていると考えることができる。動詞的動名詞の場合は，名詞句と異なり，主語を必要とするのが文や節の特徴であって，その主語が省略できるのは，上位の文中などに同一の名詞句（コントローラ (controller) の名で呼ばれる）があることによって，脈略か

ら復元できる場合に限られる。よって，動詞的動名詞の意味上の主語が上位の文中の同一の名詞と同じになる事実は，動詞的動名詞の内部構造が文という考えに符号する。

一方，名詞的動名詞の場合は，(51b) のように，たまたま，所有格が明示的にはもちろん，その所有格が，偶然，意味上の主語を示すが，所有格がない場合には，動詞的動名詞と異なり，特定のコントローラはもたないと考えられる。したがって，名詞的動名詞と解釈する場合，意味上の主語は所有格によって示されていないので，特別な文脈がないかぎり，誰であってもよいのである。

変形文法では，主語をもたない動名詞節の意味上の主語は，(音形をもたない) PROを主語に持っていると考える。Wasow and Roeper (1972: 44) の次の (52) をみることにする。

(52) a. I abhor *singing*.
b. I abhor *singing operas*.

PRO主語動名詞は，(52a) の名詞的動名詞と (52b) の動詞的動名詞に分けている。(52a) の singing の主語は誰でもよいが，(52b) の主語は主節主語のIで，主語コントロールされている。PRO 主語動名詞に関して，次のような一般化が提案されている。

(53) 義務的コントロールのない動名詞は名詞句の内部構造をもった動名詞である。

(*ibid.*: 46)

(52a) では，動名詞が名詞句としての内部構造をもつ名詞的動名詞なので，義務的コントロールをもたない。これに対し，(52b) では，動名詞は名詞句としてではなく，文の内部構造をもつ (例えば，動詞の後に，of－前置詞句を介在させずに，目的語が直接後続している) ので，義務的コントロールをもつことになる。したがって，名詞的動名詞の場合は，一般に，動詞的動名詞とは異なり，意味上の主語との結びつきが薄く，コントローラはなく，動名詞の意味上の主語には，制限がないということになる。(52a) と (52b) を動詞的動名詞に解す

ると，その基底構造は，次の (54) になる。

(54) a. I_i, abhor [PRO_i singing] .
　　b. I_i, abhor [PRO_i singing operas] .

動名詞の意味上の主語が，表面的に，明示されていなければ表面的な構造のどこか別のところに，通例，同じ名詞句があると考えると，(54) の意味上の主語は，コントローラが，一人称単数であることから，必然的に，ＩとPROは同一指示 (coreference) なので，Ｉでなければならなくなる。Chomsky (1981: 65) は，このことを［代名詞回避の原理 (avoid pronoun principle)］と呼んでいる。

したがって，動名詞の意味上の主語が，明示されていないとき，動名詞の主語は，通例，動詞的動名詞を含む文中に現れているしかるべき名詞句と解釈されなくてはならないのに対し，名詞的動名詞の意味上の主語は，そのような解釈をうける必要がないということになる。

さらに，次の (55) は，動名詞の意味上の主語が先行する文中にみあたらない例である。

(55) *Revising a book* may take a lot of time. [indefinite or generic subject]
(56) PRO *Revising a book* may take a lot of time.

revisingの意味上の主語が，非特定的 (non-specific) か総称 (generic) のoneであると考えれば，一般に，非特定的名詞は自由に削除してもかまわないので，(56) におけるように，動詞的動名詞が文から派生されたと考えられる。(56) のPROは先行詞をもたず［一般の人々］のように，非特定的な人を指すので，［恣意的POR (arbitrary PRO)］と呼び，PRO_{arb} と表示されることになる。

references

Chomsky, N. (1970), "Remarks on nominalization," in Jacobs and Rosenbaum (eds.), pp.

184-221.

_____ (1981), *Lectures on Government and Binding*, Floris, Dordrect.

Declerck, R. (1991), *A Comprehensive Descriptive Grammar of English*. Tokyo: Kaitakusha Co., Ltd.

Fillmore, C. J. (1968), "The case for case," in E. Bach and R T. Harms (eds.), pp. 1-18. New York: Holt, Rinehart, and Winston, Inc.

Fraser, B. (1970), "Some remarks on the action nominalization in English," in Jacobs and Rosenbaum (eds.) , pp. 83-98.

早瀬尚子 (2002),『英語構文のカテゴリー』勁草書房.

Huddleston, R. and G.K. Pullum (2002), *The Cambridge Grammar of the English Language*. Cambridge: Cambridge University Press.

Jespersen, O. (1933), *Essentials of English Grammar*. London: George Allen and Unwin.

_____ (1940), *A Modern English Grammar on Historical Principles*, Part V, London: George Allen and Unwin.

Langacker, R. W. (1991), *Foundations of Cognitive Grammar*, Vol. 2 : *Descriptive Application*. Stanford : Stanford University Press.

Leech, G. N. (1987), *Meaning and the English Verb*, London : Longman.

Lees, R. B. (1960), *The Grammar of English Nominalizations*. New York : Holt, Rinehart and Winston, Inc.

Quirk,R., S. Rosenbaum, G. Leech, and J. Svartrik (1985), *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London : Longman.

Swan, M. (1995), *Practical English Usage*. Oxford : Oxford University Press.

Thomas, O. (1965), *Transformational Grammar of the Teacher of English*. New York : Holt, Rinehart and Winston, Inc.

Thompson, S. A. (1973), "On the subjectless gerunds in English," *Foundations of Language*, 9 : 374-83.

Wasow, T. and T. Roeper (1972), "On the subject of gerunds," *Foundations of Language*, 8 : 46-61.

安井　稔 (1974),『英語学の世界』大修館.

_____ (1989),『英文法を洗う』研究社.